

勇僧湛然和尚

立 花 俊 道

今から二百七十餘年前、萬治寛文の頃、月舟宗胡和尚が板倉周防守の菩提所なる三河國長圓寺に昇住してから間もなく、肥前國高傳寺から一桂懷芳といふ使僧が長圓寺に見えて、月舟和尚に任持顎峯桂雲和尚の命を傳へ、高傳寺へ轉住せんことを願つた。月舟和尚はやはり、肥前國の出身ではあり、特に高傳寺は國主鍋島家の香華院であつて見れば、この請待を嬉しくは思つたらうが、長圓寺入山後久しく經たぬ時ではあり、大檀越板倉周防守は大岡越前守と並び稱せられるほどの明君であつたさうだが、それが「月舟はいかうようござる」と言つて褒めもし、歸依もしたといふ位だから、一寸動くわけには行かなのであらう。彼は同じ肥前人で當時三河の某寺の住持であつた湛然梁重和尚を推薦した。この梁重和尚は桂雲和尚の後を受けて高傳寺の十一世となつたが、彼は一方には禪宗寺院内の亂れたる綱紀を正し、一方には佐賀藩獨特なる『葉隱』武士道の一流流となり、禪武兩道に互つて大にその氣焰を揚げた、稀に見る大豪勇僧で

あつたのである。

二

彼は禪僧といつても酒脱とか磊落とかいふ方面ではあまり知られてゐない。恐くは眞面目な嚴肅な常住不斷に緊張した質の禪僧であつたらしい。彼は又正義の心強く慈悲同情の念深く義侠の精神に富んでゐて、正しきものが歪められたり、弱きものが虐げられたりするのを見ては、寸毫も假借することが出来なつた。同じ禪宗僧侶のために彼が命乞ひをした話が二つまで傳はつて居る。

今佐賀の市内に龍雲寺といふ禪寺があるが、其處に傳湖といふ若年の僧があつた、佐賀から六七里を隔てた多久の生れであつた。多久なる彼の實家には、兄次郎兵衛の妻子及び母と弟とが棲んで居たが、一夜母は孫を伴れて寺の談義を聞きに行き、歸りがけに履物を探してる中、孫が人の足を踏んだとかで、それが喧嘩の基になり、孫はその場に切り殺された。祖母は狂氣のやうになつて、そのものへしがみ付いたが、これも突伏せられて了つた。つまり、一時に祖母と孫と二人殺されたのである。この狼籍者は中島茂菴と呼ぶ浪人者の子で、その名を五郎左衛門といひ、その弟は中藏坊と呼ぶ山伏であつた。傳湖兄次郎兵衛は意氣地なしであつたやうだが、弟の某は氣丈な青年であつたらしく、直に行つて五郎左衛門と組合ひ彼を突き殺した。しかし彼は中藏坊のために切伏せられて又命を果した。一方は一人だけ傷められたが、一方は三人死んだことになる。傳湖は無念やる方なく何とかして怨みを晴したいと思つが、平僧の身分ではそれも

思ふやうにならず、時の到るを待つて居た。いよく、龍雲寺の住職となつた時、彼は大小を打たせ、一日俗人の身拵へをして多久へ忍んで行つた。中藏坊は近所の寄合ひに行つて留守であつたが、父茂菴は寝て居たので、その寢室へ駈込んで首尾よく打止めることが出来た。これが裁かれる段になつて現はれたのがこの湛然和尚である。彼は「一派の仕置は高傳寺代のまゝにて候、御構ひあるまじき由に候」といつて多久の領主美作の關涉を全然排斥し、「破戒の出家は脱衣追放仕る作法にて候」といつて、傳湖を高傳寺へ伴れて來て法衣を脱がせ、肥前領外へ追放して了つた。彼は他國へ行つて樂に暮したらしい。

三

今一つ同じ禪宗坊主のために命乞ひをした話がある。それは中の館の圓藏院の村了といふものが、圓藏院を佐賀十二ヶ寺の中に加へてくれといつて度々訴へ出たが、一向顧みられないので、藩主へ直訴を企てた事件があつた。藩主が慶闇寺といふ田舎寺へ參詣され、佛前で焼香しようとしてされてる途端、須彌壇の下から直訴狀を差出したのであつた。それ狼籍者といふわけに捕へようとしたが、彼は遁れて田甫道を逃げ廻つてる中に捕へられ、斬罪に行はれることになつた。その時湛然和尚「出家を御殺し遊ばさるものに無之候。衣を被せ申候間、御助下さるべき由御斷申上げられ候。」とあつたが藩主は御承引無之てやはり斬罪仰付けられた。湛然和尚はなかく、豪膽な人であつたらしく、村了が某寺の後なる畑の中でいよく斬罪に行はれるといふ時、その場に現はれてそれを差止めやうとした。しかし斬首を承つて居る役人等は

湛然和尚を藩主の菩提所なる高傳寺の大方丈であるとは知る由もなく、これを一個の狼籍者醉狂者と見て、仕置場の所へ引摺り出して了つた。後に至つてこの狼籍者と見たのは實は藩主の歸依篤き大善知識だと知れ、役人の中には申譯の爲め自害したのもあつたといふ。和尚自身も亦高傳寺へは還られず、北山の通天庵へ引込み、その境内に華藏庵といふ一小庵を結んで其處に殘年を送つた。

四

この二つ話だけでも和尚の爲人の大概を知ることが出來やう。武士と出家とは一つは武勇を表にし、一は慈悲を表にし、而も互に武勇と慈悲とを取遣りせねばならぬといふのが和尚の持論であつた。これに就て『葉隱』といふ武道書の中に、

「湛然和尚平生の示に、出家は慈悲を表にして、内心は飽まで勇氣を蓄へざれば佛道を成就すること能はざるものなり。武士は勇氣を表にし、内心は腹の破るゝほど、大慈悲心を持たざれば家立たざるものなり。これに仍つて出家は武士に伴つて勇氣を求め、武士は出家に便りて慈悲心を求むるものなり」

といつてある。それから彼は、自分がまだ若年の身で遍參行脚をした頃、知識に會つて法を問して見たが、一として修行の便利になつたことはなかつた。しかし勇士とさへ聞けば、道難易遠近を問はず、訪ねて行つて武道の話を聞いたがこれによつて得る所は實に多かつた。武士は敵陣に入るに武具を持つて居るが、出家は一連の珠數きり槍で長刀の下をも

潜らなければならぬ、これも勇氣がなくては出来ないことである。大法事の時ぶるぐ震へながら焼香する和尚は見苦しきもの、出家は蘇へる死人を蹶倒しもし、地獄の衆生を引上げもしなければならぬ、これも勇氣がなくては出来ないことである。

和尚の武勇禮讚は斯ふして盡る所を知らない。彼は獨りその禮讚者たりしばかりでなく、體驗者でもあつたことは勿論である。和尚世を去つて後二百五十餘年の今日、出家に武勇の要あることを痛感してこの文を綴る。